

野芥遺跡10

—第23次調査報告—

2023

福岡市教育委員会

野芥遺跡10

—第23次調査報告—



遺跡略号 NKE-23
調査番号 2130

2023

福岡市教育委員会



野芥遺跡23次調査区 全景（南西より）



野芥遺跡23次調査区 全景（西より）



古墳時代前期の土坑・上層 SK02（西より）



古墳時代前期の土坑・中層 SK02（西より）

序

福岡市は玄界灘を介して大陸・半島と一衣帶水の関係にあり、古くから交流がおこなわれてきました。なかでも博多湾岸には、先史時代から中・近世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の都市化により失われる文化財を保護し、後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、早良平野東部に立地する野芥遺跡第23次調査について報告するものです。この発掘調査では3世紀頃の古墳時代前期の土器の集積から在来系の土器のほか山陰や近畿地方などの外來系土器が検出されました。また溝状遺構からは弥生時代終末期の壺棺や碧玉製管玉などが出土しました。これらは郷土の歴史を解明するうえで重要な資料となるものです。

本書が文化財保護への理解を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご指導を賜りました。心より御礼申し上げます。

令和5年3月23日

福岡市教育委員会
教育長 石橋 正信

例　　言

1. 本書は福岡市が、令和3年度に福岡市早良区野芥2丁目で実施した野芥遺跡第23次調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理報告書作成は、受託事業として実施した。
3. 実測図作成および写真撮影の実施は、以下のとおりである。

業務内容	担当者
遺構実測図作成	常松 幹雄、藤野 雅基
遺構写真撮影	常松
遺物実測図作成	山崎 賀代子
遺物写真撮影	常松
製図	常松、山崎 賀代子

4. 炭化物の分析報告については株式会社古環境研究所に委託した。
5. 本文に掲載した公共座標は世界測地系である。
6. 本文中に掲載した方位は、座標北を示す。
7. 本書に使用した国土地理院データは福岡市WEBGISの情報をもとに作成したものである。
8. 本文中に使用する遺構略号とその性格は、以下のとおりである。
SD : 溝 SE : 井戸 SK : 土坑 P : 柱穴 SX : その他の遺構
9. 本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
10. 本書の編集・執筆は常松が行った。

遺跡名	野芥遺跡	調査次数	23次	調査略号	NKE-23
調査番号	2130	分布地図図幅名	083 野芥	遺跡登録番号	0319
調査地	福岡市早良区野芥2丁目834番1			調査面積	215m ²
調査期間	令和3(2021)年10月4日～令和3(2021)年12月10日				
整理期間	令和4(2022)年4月1日～令和5(2023)年3月31日				

本　文　目　次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	2
IV. まとめ	18
V. 野芥遺跡第23次調査出土炭化物の自然科学分析報告	19

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、令和3年6月2日、有限会社 平成ホームから提出された早良区野芥2丁目834番1における埋蔵文化財の有無についての照会を受理した（事前審査番号2021-2-232）。これを受けて埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である野芥遺跡に含まれることから令和3年7月20日に試掘調査を実施した。

申請地は、8次調査で検出された溝の延長部にあたることから遺構の存在が見込まれていた。試掘調査によって、地表面下約100cmにおいて遺構の存在を確認したことから協議を行った。その結果、今後想定される開発にたいして埋蔵文化財への影響は回避できないとみられることから、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

令和3年9月13日に有限会社 平成ホームと福岡市で埋蔵文化財調査業務委託契約書を交わした。発掘調査は令和3年10月4日から12月10日にかけて行い、令和4年度に資料整理および報告書の作成を実施した。

年末にかかる調査であったが、関係者には発掘現場の条件整備について迅速な対応をはかっていた。また調査内容について写真パネルなどの公開にご理解をいただき、地域住民への埋蔵文化財（野芥遺跡）の周知につとめることができた。

2. 調査の組織

調査委託：有限会社 平成ホーム

調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査：令和3年度・資料整理：令和4年度）

調査総括：文化財活用部埋蔵文化財課課長 菅波 正人

同課調査第1係長 本田浩二郎

同課調査第2係長 蔵富士 寛（令和3年度）

井上 蘭子（令和4年度）

内藤 愛（令和4年度）

調査庶務：文化財活用課

事前審査：埋蔵文化財課 事前審査係長

同課事前審査係 文化財主事

田上勇一郎

三浦 悠葵

神 啓崇（令和4年度）

調査・報告担当：同課 主任文化財主事

常松 幹雄

II. 位置と環境

野芥遺跡は、早良平野東南部の標高約20mの扇状地に立地している。これまでの調査で弥生時代から古代・中世にかけての集落の存在が明らかになっている。

野芥は古代には能解郷、のち八条院領野芥庄があった早良区野芥一帯に比定される。『筑前国統風土記』には「和名抄」の能解郷の遺称地とする説がある。中世には野芥庄を本拠地とする武士、野芥氏があり、弘安八年に岩門合戦後水城左衛門尉跡（太宰府市）を恩賞として与えられている。野芥氏は鎮西探題の使節もつとめたが南北朝以後については不詳である。

23次調査区は地下鉄7隈線の野芥駅の南150mほどに位置している。調査地は標高19mほどの沖積地に形成された台地の西で、浅い谷をはさんで東側には飯倉遺跡が立地する更新世の台地が博多湾側に長くのびている。

23次調査区の西隣では1996年に第8次調査が行われた（市報告576集）。8次調査区の中央では南北方向にはしる溝SD02が検出された。TK47型式の有蓋高壙をともなっており埋没時期は5世紀代後半と推定される。23次調査区と関連する遺構としては幅2.2m深さ1.4mの二段に堀込まれたSD03がある。ここでは5世紀代の土器がまとまって出土した。このなかには絵画風の線刻のある資料が含まれていた。

23次調査区付近では5世紀代の溝の延長部が想定されていたが、出土遺物を精査すると溝の下層では弥生時代終末期から古墳時代に移行する段階の土器がまとまって検出された。また調査区の北東部では古墳時代初頭の土器の集積が検出された。このなかには山陰や近畿などの外來系土器も含まれており、3世紀代の早良平野の動向を示している。

【参考文献】

『筑前国統風土記』は、福岡藩が元禄元年（1688年）に、福岡藩の儒学者・貝原益軒を著者とし、甥の貝原好古、高弟の竹田定直らが編纂した筑前国の地誌である。

貝原益軒・伊東 尾四郎 1988『筑前国統風土記』増補版、文献出版

楽平凡社2004「福岡県の地名」「日本歴史地名大系」第41巻

III. 調査の記録

（1）調査の概要

23次調査では、調査区の北側をI区、反転した南側調査区をII区とよぶ。

I区は地表から-100~110cmで灰褐色砂を含むシルト層の遺構面に達した。I区の北側で、西に隣接する8次調査で検出されたSD03の延長部にあたる断面U字の溝SD01を検出した。溝は南西から北東方向にのびており、深さ約1m、中央に深さ40cmの2段の掘り込みをもつ構造となっている。弥生時代終末から古墳時代にかけてを主体とする土器のはか碧玉製の管玉1点が出土した。

また調査区の東で古墳時代初頭の土器集積遺構SX02が検出された。在来の西新式の甕のはか山陰系二重口縁の甕や低脚杯、近江系の受口状口縁の甕、庄内式の甕などの外來系土器のはか板状の鉄製品が出土した。古墳時代初頭に比定される。

出土遺物から調査地周辺には3~4世紀代を主体とする集落が存在したと推定される。

土器集積遺構SX02では、在来系土器に山陰・近畿地方など外來系土器がともなっており、早良平野における3世紀代の動向を理解するうえでの基礎資料を得ることができた。

南側調査区のII区は粗砂とシルトからなる沖積層である。南北方向の溝SD04と性格不明の落ち際SX03を検出したが特記すべき出土遺物はみられなかった。遺構実測の後、埋戻しを行い令和3年12月10日に機材を撤収し調査を終了した。

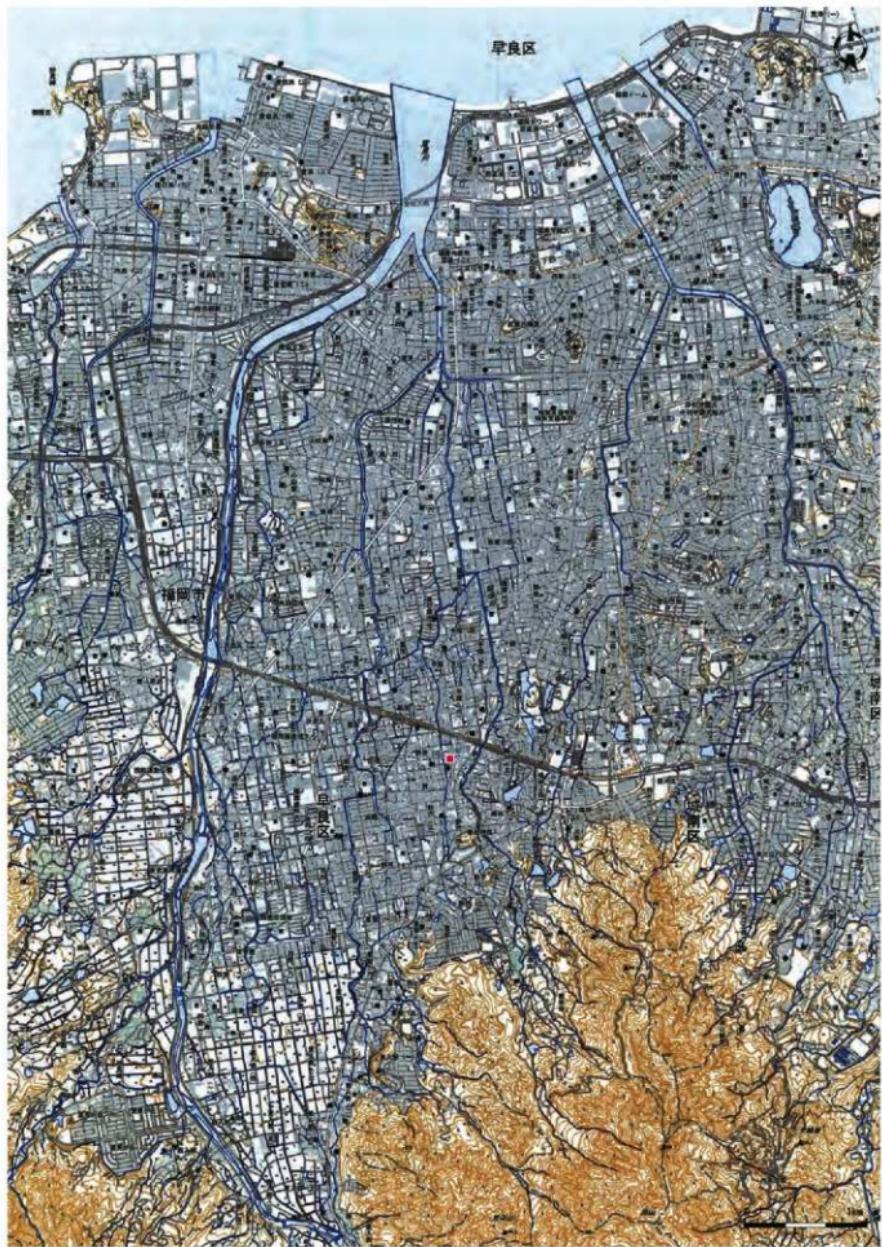


図1 野芥遺跡23次調査地点の位置 (1/40,000) ■23次調査地点

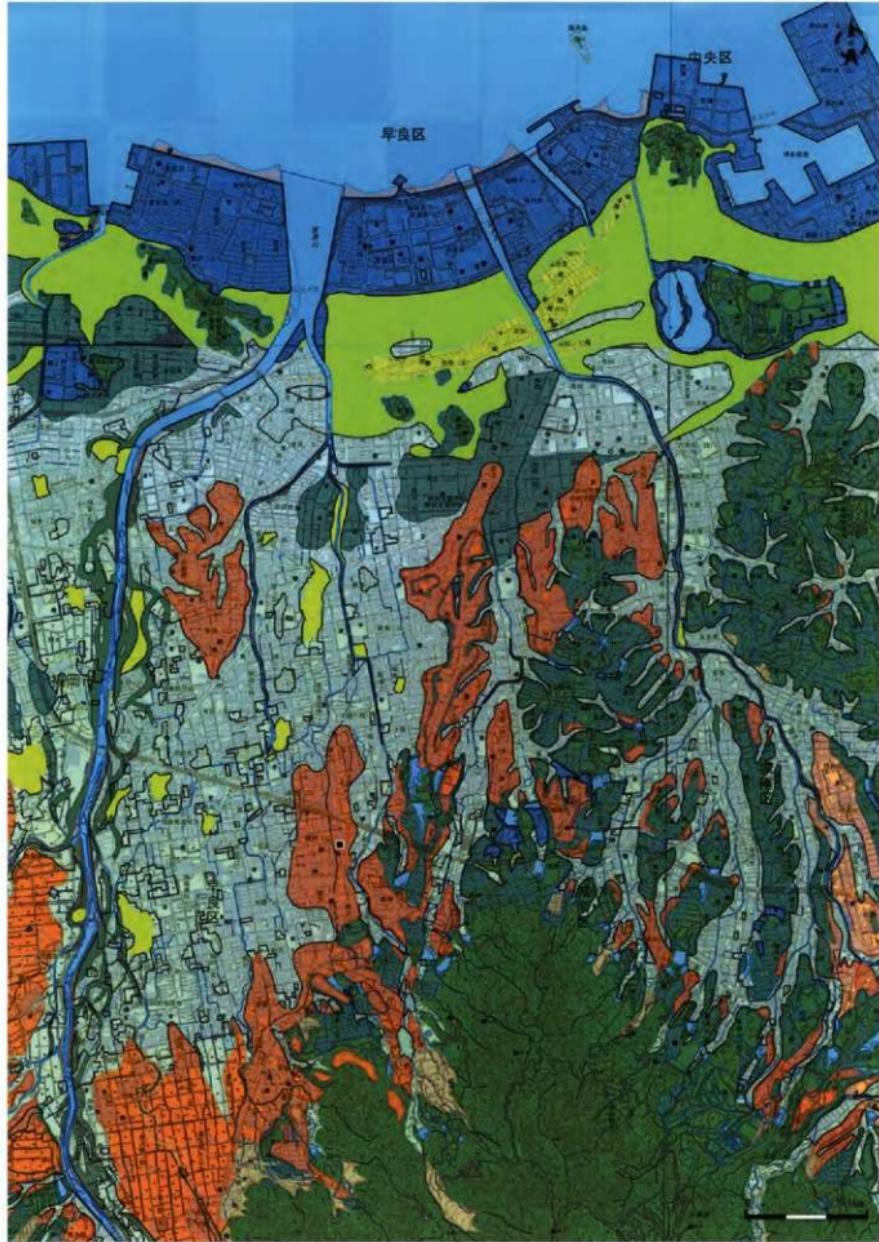


図2 野芥遺跡23次調査区の立地 (1/40,000) ■23次調査地点

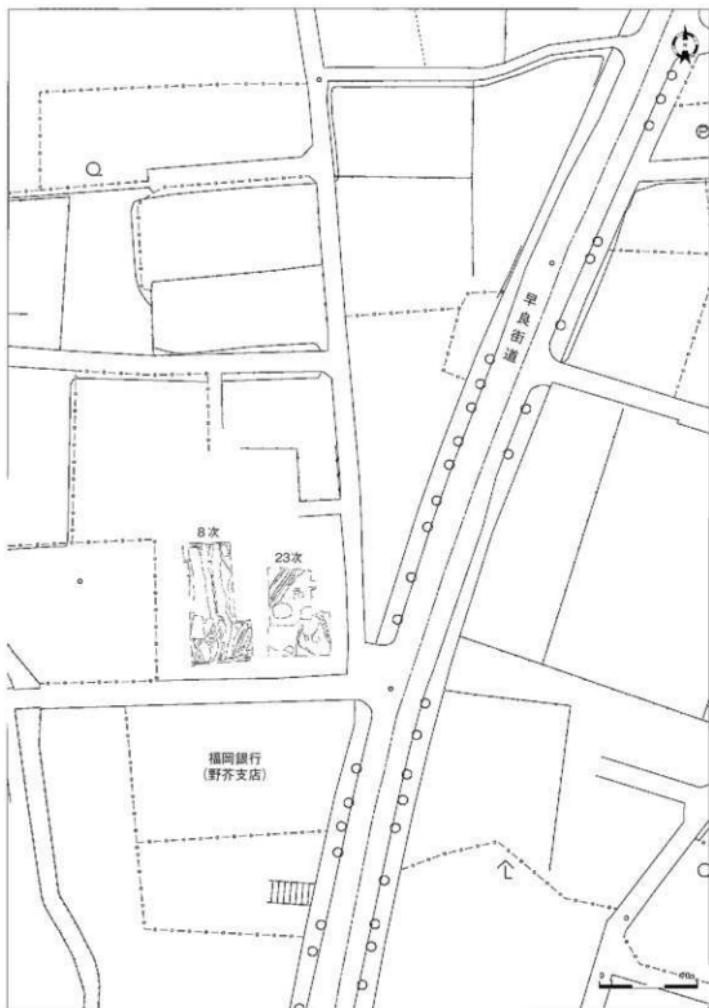


図3 野芥遺跡8・23次調査区位置図 (1/1,000)

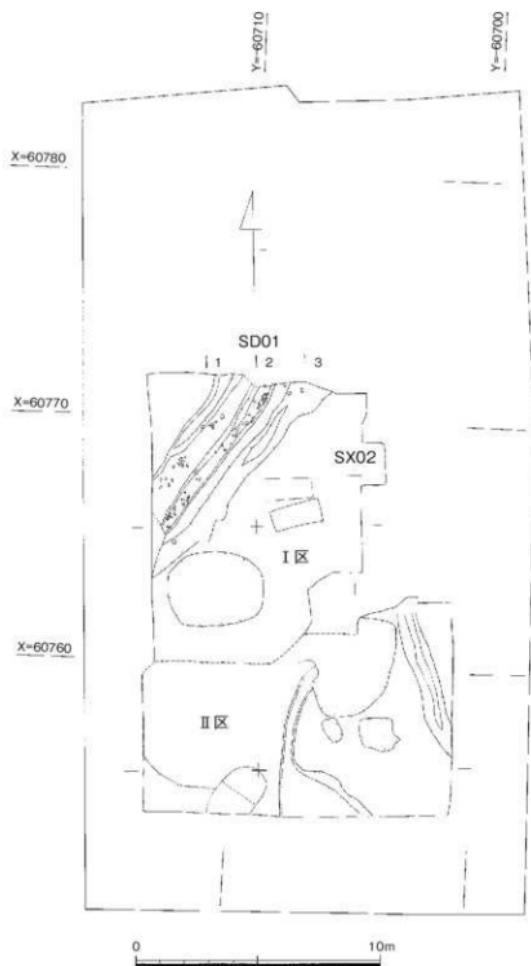


図4 野芥遺跡23次調査区造構配置図 (1/200)

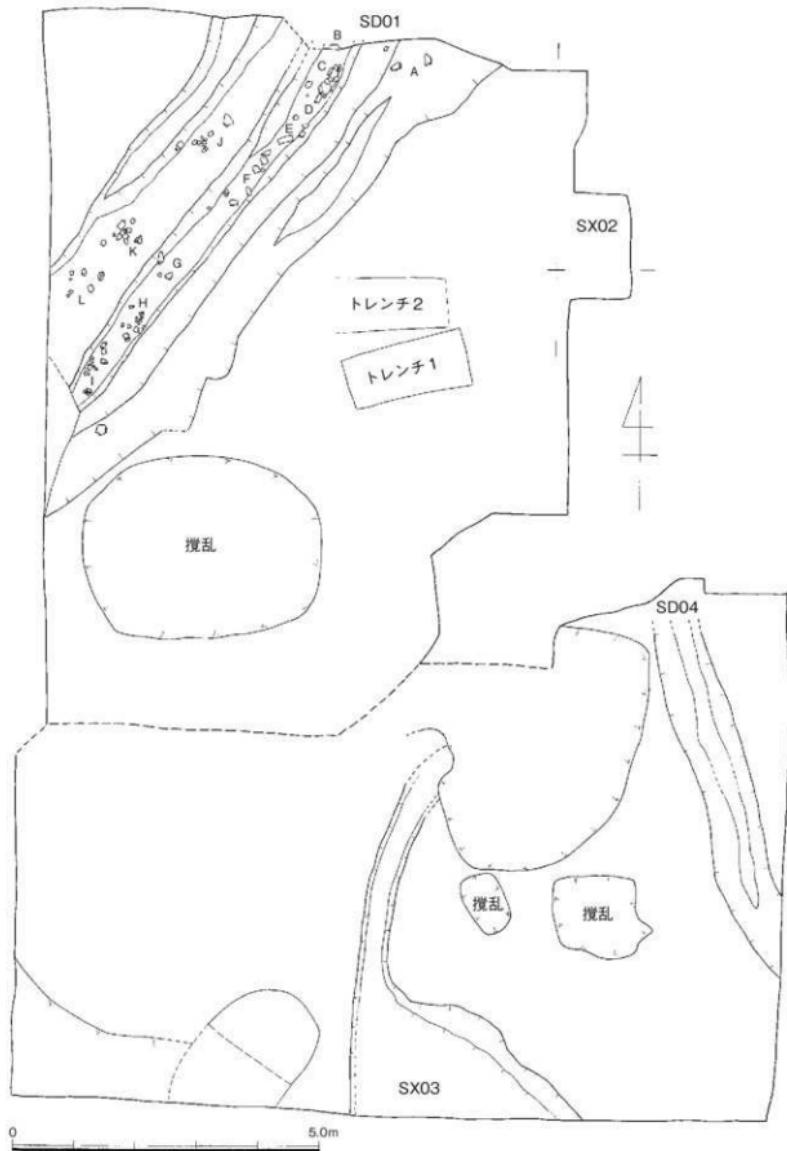


図5 野芥遺跡23次調査区遺構配置図 (1/80)

SD01（溝状遺構）

SD01は8次調査で検出されたSD03の延長部にあたる断面が鈍角のV字を呈する溝である。SD01は全長7.5mを掘削した。立上り箇所で17.9m、中央の2段目の掘り込みの底部で16.85m、およそ1.0m掘削されている。

北壁土層（図6）に示すようにSD01は地表面で19.0m、客土下の黄灰色土層は溝に沿った崖みに近世までの遺物が堆積したものである。その直下の暗茶灰色土層は下面で古墳時代の遺物が含まれている。2段目の掘り込みの底部は北側で16.85m、南側および中央で17.0mをはかる。報告書によれば約10m南西にあたる8次調査の2段目の掘り込みの標高は16.40mとなっており、報告書から判断すれば北から南への傾斜がみられる。

SD01出土遺物

出土遺物は2段目の掘り込みの底部を下層、その西側のテラス状の箇所を中層とする。

1 (A・J・E)は弥生終末期の壺棺である。SD01の中層で破壊された状態で検出された。口径44.6cm、底径8.3cmで、総高72cm、胴部最大径は54.0cmに復元される。頭部、胴部上半と胴部下半に突帯がめぐる。頭部突帯はハケ目調整具の当て方に変化をもたせることで4通りの刻目となっている。胴部上半の突帯はタタキを加えながら約2cm間隔で広狭にアクセントをもたせている。胴部下半の突帯はタタキを加えている。タタキ成形で器表面および内面にハケ目調整を施している。厚さは口縁部で約1.4cm、胴部は約1.0cm、底部で約3.0cmをはかる。橙色で焼成は堅緻である。ハケ目をなで消さない調整から弥生終末期の福井式に分類される。不安定な平底は大型土器の場合に終末段階にかけて遺存する特徴である。

2 (C)はSD01下層の北端で出土した丸底の壺形土器。口径23.4cmで、総高37.5cm、胴部最大径は31.5cmに復元される。頭部に断面三角形の刻目突帯をめぐらす。内外面とも粗いハケ目調整である。橙色を呈し、焼成は良好である。在来系の西新式に分類される。

3 (H)は長胴の壺形土器である。「く」字状口径22.5cmで胴部最大径は29.5cmに復元される。タタキ成形の後、内外にハケ目調整を加える。西新式に分類される。

4 (C)は布留系の壺形土器である。球形の胴部に外湾気味に立ち上がる口縁を有している。口径20.4cmで、胴部最大径は25.3cmに復元される。外面は粗いハケ目調整、内面はケズリ調整を施す。砂礫を多く含む。茶灰色を呈し、焼成は良好である。

5は長胴の壺形土器である。口径17.4cmで胴部最大径は24.0cmに復元される。胴部外面は縦方向のハケ目調整、内面は下から上へのケズリ調整で粘土の輪積の痕跡が観察される。茶灰色を呈し、焼成は良好である。

6 (J)は長胴の壺形土器である。口径17.8cmで胴部最大径は23.4cmに復元される。胴部外面は縦方向の細かいハケ目調整、内面は下から上へのケズリ調整で肩部内面は指ナデの痕跡が観察される。茶灰色を呈し、焼成は良好である。

7 (H)は布留系の壺形土器である。球形の胴部に外反気味に立ち上がる口縁を有している。口径15.0cmで、胴部最大径は18.2cmに復元される。薄手で軽量。外面は縦方向のハケ目調整、内面は横方向のケズリ調整を施す。にぶい黄褐色を呈し、焼成は良好である。

8 (D)は布留系の壺形土器である。球形の胴部に外湾気味に立ち上がる口縁を有し屈曲部は幅1cmほどの面をなしている。口径17.0cmで、胴部最大径は20.3cmに復元される。外面は横方向のハケ目調整、内面はケズリ調整を施す。浅い黄橙色を呈し、焼成はやや軟質である。

9は布留系の壺形土器である。球形の胴部に外湾気味に立ち上がる口縁を有し屈曲部は幅1cmほどの面をなしている。口径15.4cmで胴部最大径は18.3cmに復元される。薄手で軽量。外面は縦横のハケ目調整、内面は下から上方向のケズリ調整を施す。にぶい黄橙色を呈し焼成は良好である。

10(I)は布留系の壺形土器である。球形の胴部に外湾気味に立ち上がる口縁を有し端部は内側に稜線がめぐる。屈曲部はわずかに面をなしている。口径16.4cmに復元される。外面に横方向のハケ目調

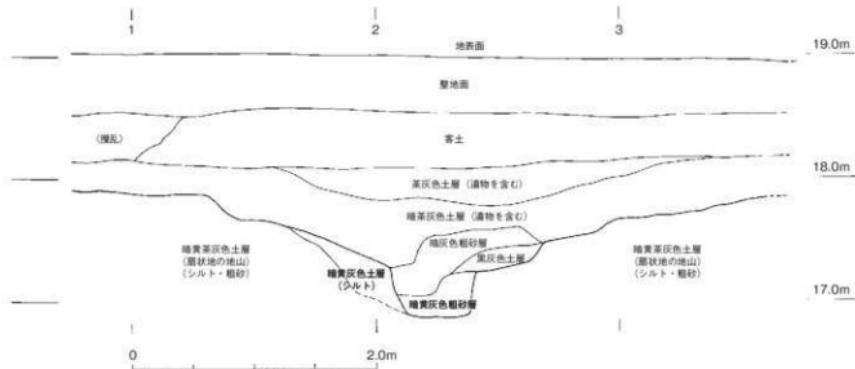


図6 野芥遺跡23次調査区SD01北壁土層図 (1/40)

整、内面は下から上方向のケズリ調整を施す。浅黄橙色を呈し、口縁部は一部黒変する。焼成は良好である。

11(F)は布留系の壺形土器である。球形の胴部に外湾気味に立ち上がる口縁を有し、屈曲部は幅1cmほどの面をなしている。口径14.0cmに復元される。外面に横方向のナデ調整、内面は下から上方へのケズリ調整を施す。にぶい黄橙色を呈し胴部と口縁部に煤を付している。焼成は良好である。

12は二重口縁の壺形土器である。口径21.6cmを有する。薄手で軽量。内外面ともに横方向のハケ目調整を施す。黄灰色を呈している。胎土は精良で、焼成は良好である。

13は二重口縁の壺形土器である。口径25.0cmの大型の器種である。内外面ともに横方向のナデ調整を施す。にぶい黄灰色を呈し、砂礫を多く含む。焼成は良好である。

14は二重口縁の壺形土器である。内外面ともに横方向のナデ調整を施す。黄橙色を呈している。胎土は精良で、焼成は良好である。

15(D)は二重口縁の壺形土器である。内外面ともに横方向のナデ調整を施す。明黄褐色を呈し、焼成はやや軟質である。

16は壺もしくは壺形土器の口縁部である。屈曲部に二条の突帯をめぐらす。明黄褐色を呈し、焼成はやや軟質である。

17(H)は長頸の壺形土器である。扁球の胴部に外面に横方向のミガキ調整を施す。内面は底部に放射状のハケ目調整の痕跡がみられる。明黄褐色を呈し、胎土は精良、焼成は良好である。

18は在来系の鉢形土器である。口縁はゆるく屈曲し、口径14.0cmで胴部最大径は13.8cmに復元される。タタキ成形の後、内外にハケ目調整を加える。

19は高坏の坏部である。口径16.2cmで深い坏部の下段で屈曲する。橙色を呈し、胎土は砂礫を多く含むが精良、焼成は普通である。

20は高坏の坏部から脚部である。口径17.6cmで坏部の中央で屈曲する。橙色を呈し、胎土は砂礫を多く含むが精良、焼成は良好である。

21は鼓形器台である。受部径18.8cmで屈曲部の内面は面をなしている。受部、台部とも粗いケズリ痕が顕著である。鼓形器台の受部はミガキなど丁寧な調整が通例なので、本例は山陰系土器を模した可能性がある。黄灰色を呈し、胎土は砂礫を多く含む。焼成は良好である。

22(F)は高坏の脚柱部の上下を打ち欠いたものである。約5.0cmを存している。橙色を呈し、胎土

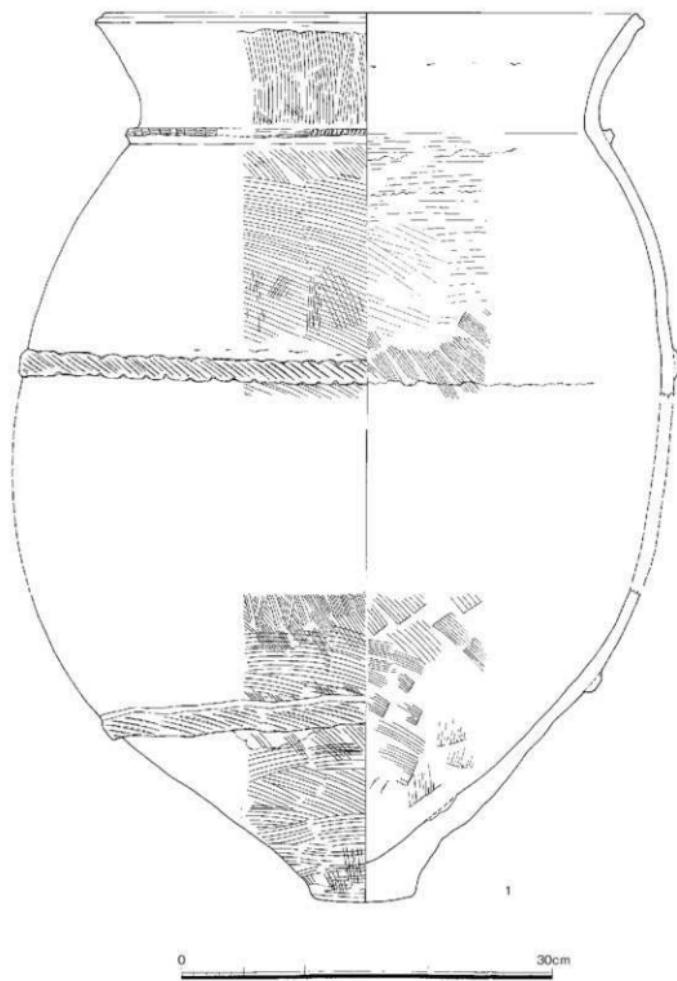


図7 野芥遺跡23次調査SD01出土遺物（1）（1／4）

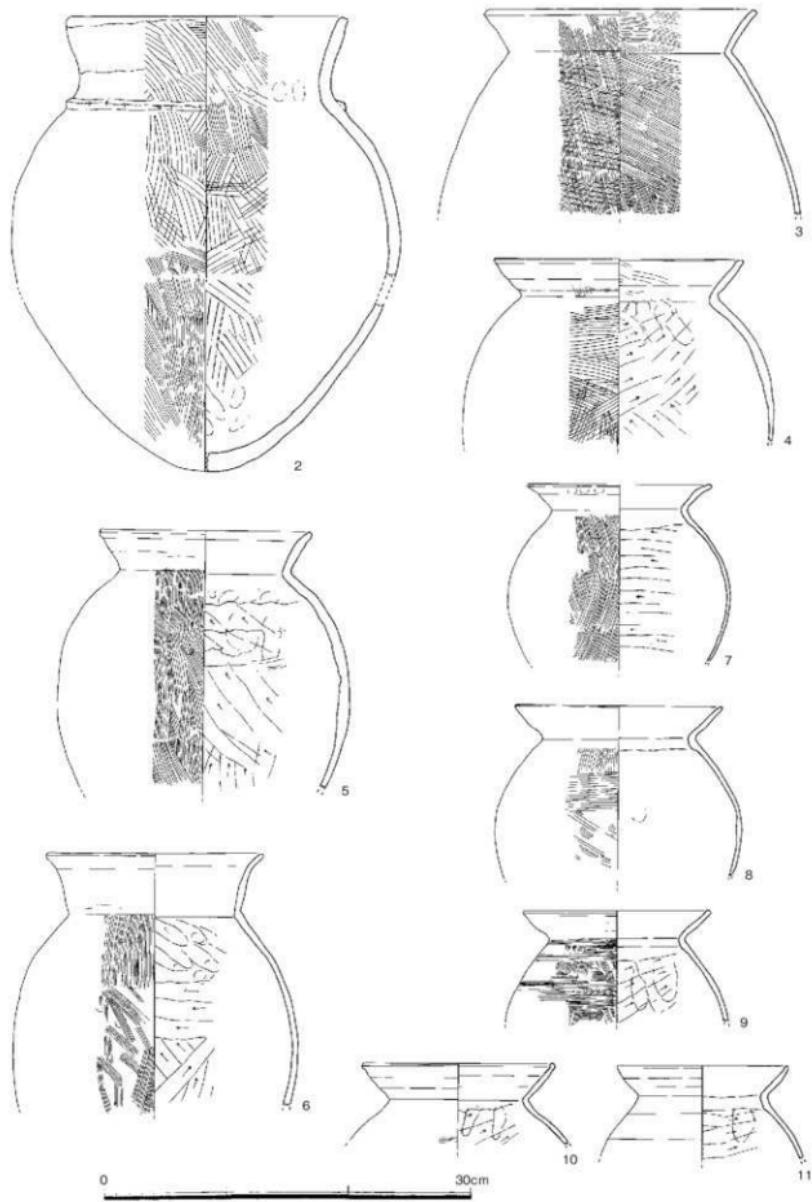


図8 野芥遺跡23次調査SD01出土遺物（2）(1/4)

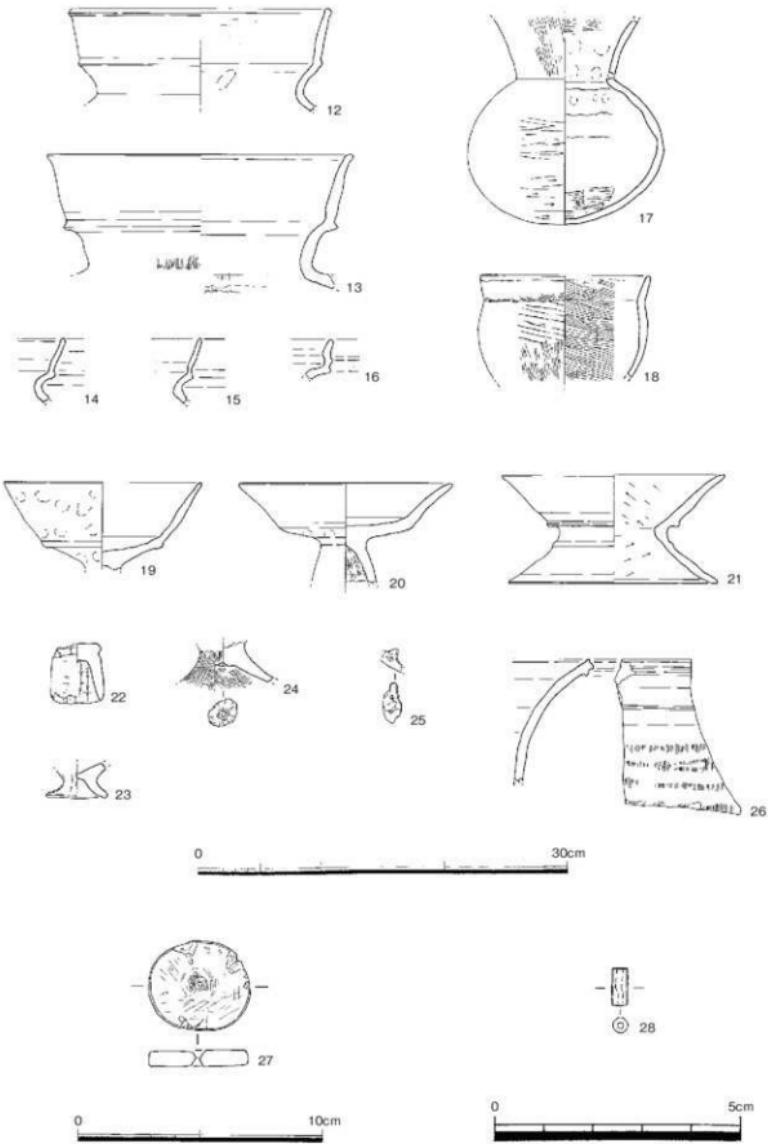


図9 野芥遺跡23次調査SD01出土遺物（3）(1/4・1/2・1/1)

は精良、焼成も良好である。

23は鉢形土器の脚部の破片である。底径5.2cm。にぶい橙色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。

24は脚台部で、三方に焼成前の穿孔がみられる。内面に成形時の軸の痕跡がみられる。内外ともハケ目調整。にぶい橙色を呈し、胎土は精良、焼成は良好である。

25は壺形土器の肩部に付された乳状突起の破片である。小片で天地を決めがたいが突起部に穿孔のある資料の多くは縦方向である。比恵遺跡7次調査では三方向に突起が付されていた。原三国時代の系譜の土器であろう。

26は須恵器の大甕の口縁部である。口縁部直下に突帶を付している。暗青灰色を呈し、胎土は精良、焼成は堅緻である。

27は滑石製の有孔円盤である。長軸4.1cm、短軸3.6cmの楕円形を呈している。両側から穿孔が行われている。

28は碧玉製管玉である。全長0.75cmで径0.3cmをはかる。両側から穿孔が行われている。弥生中期～後期の装身具が多くみられる。

SX02（土器の集積）

SX02はI区東側壁の土層観察時に土器の集積が確認され南北2.0m、東西1.5mの範囲について掘削をおこなった。土器の集積は1.5m四方に認められたが掘方が確認できず分布範囲に限定して掘下げをおこなった。

まず上面で写真撮影を行ない、レベルを入れた後、各個体の分布範囲にそって番号をつけて取り上げを行った。01～22である。このうち南端で検出された03は鉄製品である。

つぎに上層の遺物を取り上げた後を中層として出土状況を確認した。中層では中央に山陰系の二重口縁の壺形土器、南東で受口状口縁の甕などの外來系土器が確認された。写真撮影を行った後、レベルを入れ、各個体の分布範囲にそってA～Kでくくりを行い、取り上げをおこなった。中層の中央部では炭化物が確認されたため採集し、炭素年代ならびに樹種鑑定を委託した。分析結果についてはVの自然科学的分析に掲載した。

中層遺物の取り上げ後、下層の遺物について出土状況を確認した。下層では在来系の西新式の小型甕やタタキ成形の器台を確認した。各個体の分布範囲にそってL～Nでくくりを行い、取り上げをおこなった。中層の遺物は南から北にかけて緩やかに傾斜しながら堆積していた。

このようにSX02は在来系と外來系の土器によって構成されていた。在来系土器は西新式の中段階で壺形土器を主体としていた。外來系では山陰系土器や近江系とみられる壺形土器、近畿の庄内式土器などが含まれていることが資料整理の過程で明らかになった。

SX02は遺物の取り上げ後バックフォーにより周囲を掘削したが分布の広がりは確認できなかった。遺物の組成に極端なばらつきがみられないことから、土器は本來より広い範囲で集積していたものが近代の基礎工事などの影響によって図示した範囲だけが遺存したと考えられる。堀方のプランが確認できなかつたのも、こうした理由によるものと推定される。

SX02出土遺物

29(12・A・H)は受口状口縁の壺形土器である。タタキ成形の後、内外にハケ目調整を加える。口縁部に凹線状のナデが加えられている。内面の下部には下から上方向のケズリ調整の痕跡がみられる。口径17.4cmで、胴部最大径は20.0cmに復元される。橙色を呈し、焼成は堅緻である。受口状口縁は近江系土器にみられる特徴である。類例としては南田B遺跡（近江八幡市）の庄内式並行期の資料があげられる。

30(13)はやや外傾するが直口の壺形土器である。口径14.4cm、胴部最大径は24.0cmをはかる。内外面に間隔の詰まったハケ目調整を加える。浅黄橙色で焼成は良好である。

31(14・G)は在来系の小型の壺形土器である。口径14.4cm、現存高12.8cm、胴部最大径は15.5cmを

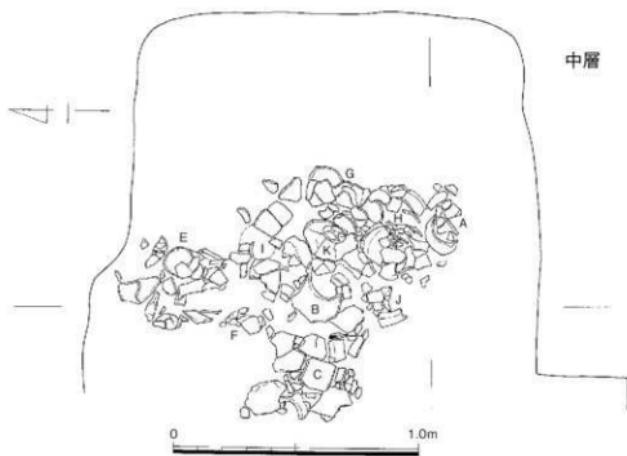
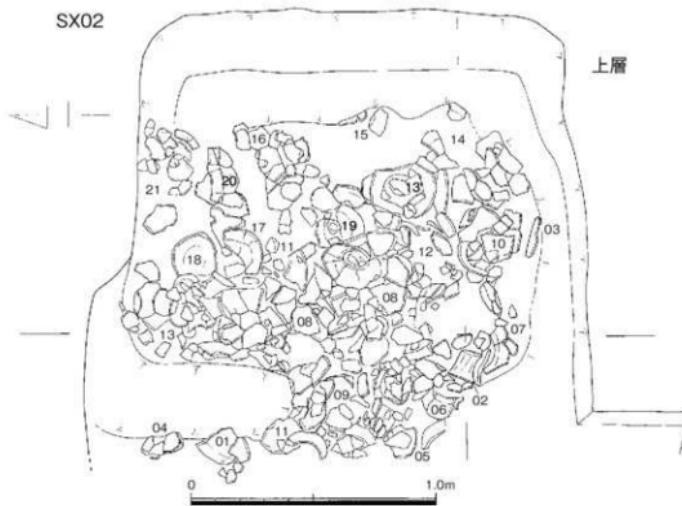


図10 野芥遺跡23次調査区SX02 上層・中層 (1/20)

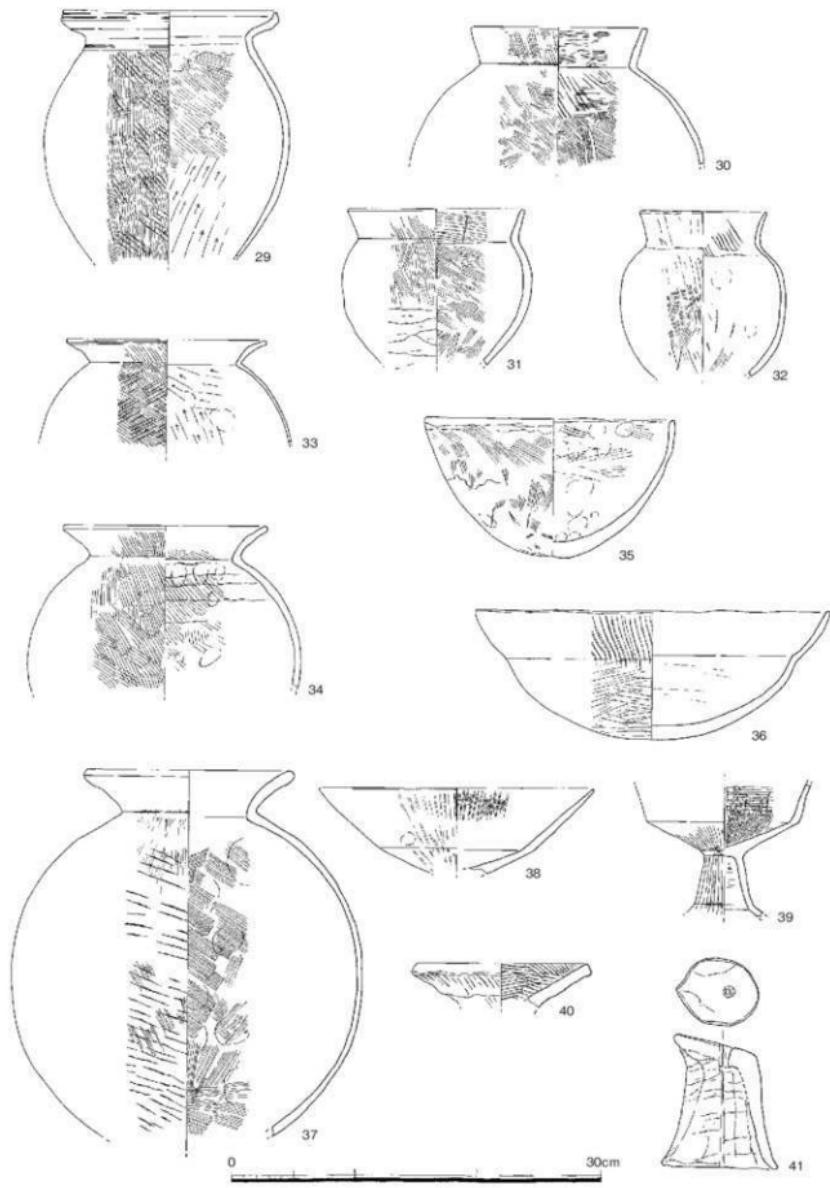


図11 野芥遺跡23次調査SX02出土遺物（1）(1/4)

はかる。内外ともハケ目調整を施し、外面の底部付近には横方向の粗いケズリ痕跡がみられる。淡褐色を呈す。

32(08・G)は小型の壺形土器である。口径10.5cm、現存高13.5cm、胴部最大径は13.5cmをはかる。内外ともハケ目調整を施し、胴部内面にはナデ調整がみられる。石英粒を多く含む。浅黄褐色を呈す。

33(06)は庄内式系の壺形土器である。「く」字状に外反する口縁部を有し端部に棱線が入る。口径16.4cm、胴部最大径は20.5cmをはかる。外面は左下がりのタタキ後ハケ目調整、内面は胴部上面までケズリを行い器壁は薄い。石英粒を多く含み黒色の自形の鉱物をわずかに含む。黄灰色を呈す。

34(20・21)は壺形土器である。「く」字状に外反する口縁部を有する。口径16.6cm、胴部最大径は22.3cmをはかる。内外ともにハケ目調整、内面は胴部上面に輪積の痕跡がみられる。外来系の器種を模したものか、石英粒を多く含む。黄灰色を呈し、内外に黒変がみられる。

35(18)は在来の鉢形土器である。丸底の底部を有し、半球形を呈している。口径20.5cm、器高は11.4cmをはかる。内外ともにハケ目調整がみられる。石英粒を多く含む。灰褐色を呈し、黒変がみられる。

36(13)は在来の鉢形土器である。丸底の底部を有し、上部でゆるく屈曲する。厚手で重い。口径29.0cm、器高は10.5cmをはかる。外面にハケ目、内面に丁寧なナデ調整がみられる。石英粒を多く含む。暗黄茶色を呈し、内外に黒変がみられる。

37(09・C)は壺形土器である。「く」字状に外反する口縁部を有する。口径17.2cm、胴部最大径は28.5cmをはかる。外面にタタキ成形の後ハケ目調整、内面は當て具痕跡をハケ目でナデ消している。石英粒を多く含む。黄灰色を呈している。

38(17・20)は高坏の受部である。受部の下方で外反する。口径22.3cmをはかる。内面は横方向のミガキの後、暗文風の磨き、外面も放射状のミガキ痕跡がみられる。石英粒を含み、黄灰色を呈している。

39(19)は高坏の受部から脚部の破片である。受部中央で外反する。内面は横方向のハケ目の後放射状に暗文風の磨き、外面は縱方向のミガキを施す。橙色を呈す。

40(07)は器台の受部である。円錐形の台部に内傾する受部がつくタイプ。受部には粗いハケ目調整がみられる。受部径14.7cmをはかる。暗黄灰色を呈している。

41(02)は完形の支脚である。器高10.8cm、裾部9.4cmで上面中央に穿孔を有する。外面にタタキによ

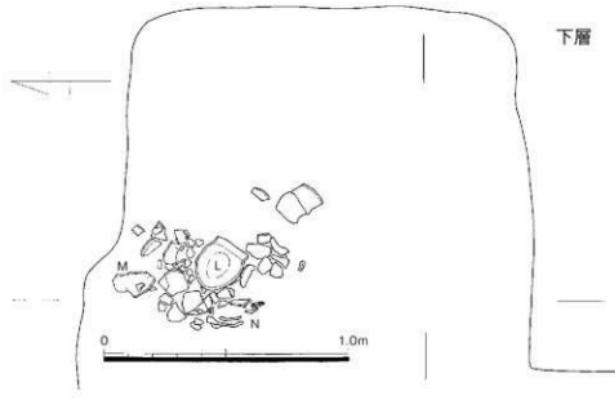


図12 野芥遺跡23次調査区SX02 下層 (1/20)

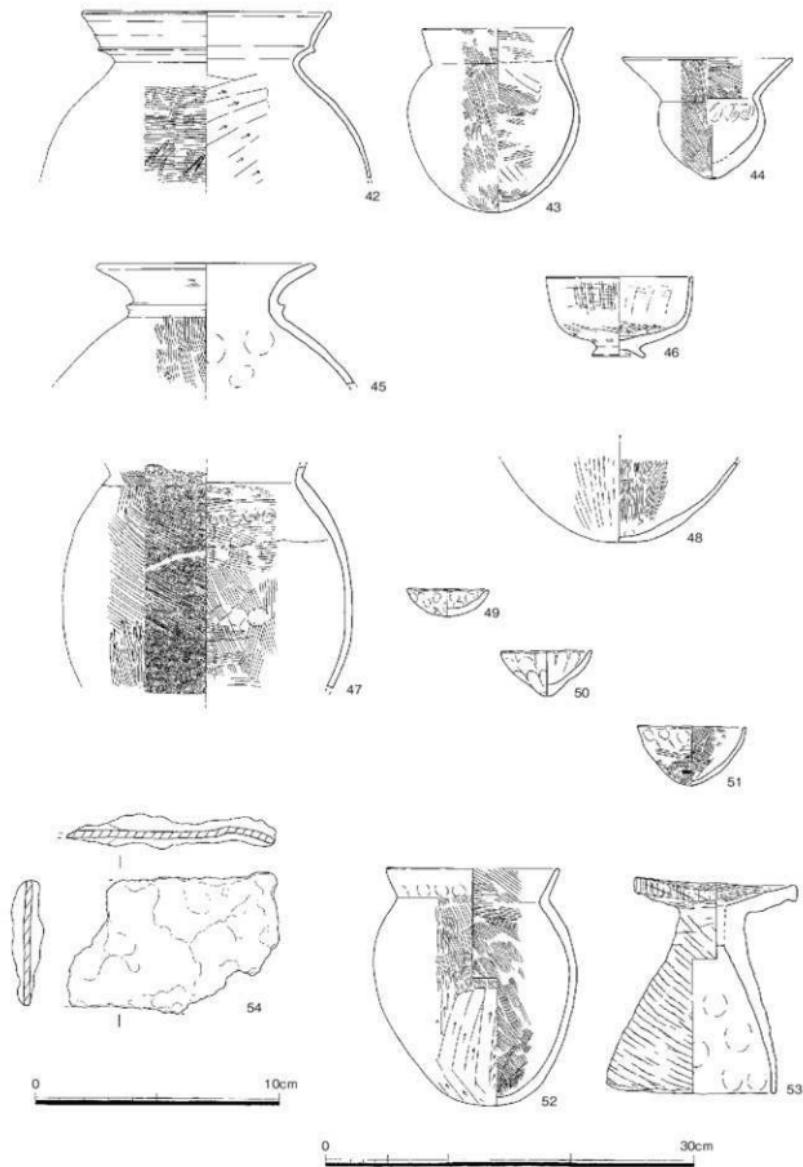


図13 野芥遺跡23次調査SX02出土遺物(2) (1/4・1/2)

る面取りがなされている。砂礫を含む。黄橙色を呈し焼成は良好である。

42は二重口縁の壺形土器である。口径20.4cm、胴部最大径は16.5cmをはかる。明黄灰色を呈し、外面に煤を付している。山陰地方からの搬入品とみられる。

43(H・K)は在来系の小型の壺形土器である。口径12.4cm、器高15.1cm、胴部最大径は14.0cmをはかる。精良な胎土で黄灰色を呈す。

44(G)は小型の壺形土器で、大きく外反する口縁部をもつ。口径14.1cm、器高9.8cm、胴部最大径は8.5cmで底部は若干上げ底となっている。内外にハケ目調整を施し、胴部内面にナデ調整を施す。石英粒、雲母粒を多く含み、にぶい茶褐色を呈す。

45(K)は壺形土器である。「く」字状に外反する口縁部を有し頸部に断面三角形の突帯をめぐらす。口径18.0cmをはかる。外面にハケ目調整、内面は磨滅が著しい。胎土は粗く石英・長石粒を多く含む。黄灰色を呈している。

46(E)は低脚坏である。口径12.0cm、器高6.5cm、脚径4.2cmをはかる。内外面にハケ目調整後丁寧なナデを加えている。胎土は精良で黄灰色を呈している。

47(C)は在来系の壺形土器で口縁部を欠く。胴部最大径は23.6cmをはかる。タタキ成形の後、内外にハケ目調整を加える。浅黄橙色で焼成は良好である。

48(G)は壺の底部である。丸底を呈している。浅黄橙色を呈す。

49は手捏ねの鉢である。口径6.7cm、器高2.2cmをはかる。

50は手捏ねの鉢である。口径7.4cm、器高3.7cmをはかる。

51(13)は手捏ねの鉢で、内面にハケ目調整が施されている。口径8.9cm、器高4.8cmをはかる。

52(L・E・13)は下層で検出された在来系の小型の壺形土器である。口径14.2cm、器高19.4cm、胴部最大径は16.5cmをはかる。胴部下半はケズリ、内面に放射状のハケ目がみられる。厚手で重い。黄灰色を呈す。西新式の中段階にあたる。

53(E・M)は下層で検出された器台である。タタキ成形による円錐形の台部に内傾する受部がつく。受部には端部に刻目とハケ目調整がみられる。暗褐色を呈している。

54(03)は上層で確認された不明鉄製品である。全面が鋸で覆われておりX線によると端部がわずかに湾曲するが板状の製品とみられる。横8.7cm、縦5.8cmをはかる。

IV. まとめ

23次調査では、古墳時代の溝SD01と古墳時代初頭の土器集積遺構の存在が明らかとなった。

溝SD01は鈍角のV字形の底部を掘りこんだ中央に2段目の掘り込みがみられる。23次で約10m、8次調査を含めると境界部分の未調査区を含めて全長23mとなる。2段目の掘り込みで古墳時代前期の土器がまとまって出土した。古墳時代初頭前後に掘削され前期に下層の2段目の掘り込みが埋まり、窪地となつた箇所の埋没過程で古墳時代の遺物が混入したとみられる。福井式壺棺は弥生終末期のものが台地の縁辺部で破壊をうけて溝に遺棄されたものであろう。

土器の集積としたSX02は、土器の堆積状況や土器組成、さらに炭化物の自然科学的分析によって導かれた暦年較正年代の 1σ ・ 2σ の年代観（V章）などから後世の再堆積の可能性は除外できるようである。

SX02の土器組成についてみると山陰系の壺形土器、庄内式系の壺形土器などの器種のほか外來系土器としては類例が少ない近江系の受口状口縁の壺形土器が在来の西新式と共に、土器編年の指標として今後の研究が期待される。

また博多湾岸部の藤崎・西新町遺跡や北西部の有田・小田部遺跡が立地する古墳時代の集落と直線距離で2~3km台の範囲であり、野芥遺跡が早良平野における交易のネットワークの一端を担っていたことが今回の調査から明らかとなったといえよう。

V. 野芥遺跡第23次調査出土炭化物の自然科学分析報告

株式会社古環境研究所

I. 放射性炭素年代測定

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壤さらには土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である（中村, 2003）。ここでは、野芥遺跡第23次調査で出土した遺構の年代を明らかにする目的で、放射性炭素年代測定を行う。

2. 試料と方法

測定試料は、土器窯 SX02 の下層より出土した炭化材（ツブラジイ：Ⅱ章参照）1点である。表1に、測定試料の詳細と前処理・調整法及び測定法を示す。測定は、試料の前処理・調整後、加速器質量分析計（コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて行った。

表1 測定試料及び処理

試料番号	採取地点（遺構）	層位	種別	前処理・調整	測定法
1	SX02	下層	炭化材 (ツブラジイ)	超音波洗浄、 酸-アルカリ-酸洗浄 (AAA)	AMS

* AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

3. 結果

加速器質量分析法（AMS : Accelerator Mass Spectrometry）によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (^{14}C) 年代および曆年代（較正年代）を算出した。表2にこれらの結果を示し、図1に曆年較正結果（較正曲線）を示す。

1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (%) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰) に標準化することで同位体分別効果を補正している。

2) 放射性炭素 (^{14}C) 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在 (AD1950年基点) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5730年であるが、国際的慣例により Libby の 5568 年を用いている。統計誤差 (\pm) は 1σ (68.3% 確率) である。 ^{14}C 年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、曆年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない曆年較正用年代値も併記した。

3) 曆年代 (Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正することで、放射性炭素 (^{14}C) 年代をより実際の年代値に近づけることができる。曆年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値およびサンゴの U/Th (ウラン/トリウム) 年代と ^{14}C 年代の

比較により作成された較正曲線を使用した。

^{14}C 年代の曆年較正には OxCal4.4 (較正曲線データ:IntCal20) を使用した。なお、曆年代(較正年代)は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した曆年代の幅で表し、OxCal の確率法により 1σ (68.3% 確率) と 2σ (95.4% 確率) で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。() 内の % 表示は、その範囲内に曆年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

表2 測定結果

試料番号	測定No (IAAA-)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正用年代 (年 BP)	^{14}C 年代 (年 BP)	曆年代 (西暦)	
					1σ (68.3% 確率)	2σ (95.4% 確率)
1	220435	-28.64 ± 0.24	1841 ± 23	1840 ± 20	166–187 cal AD (14.9%) 202–240 cal AD (53.4%)	127–245 cal AD (95.4%)

BP : Before Physics (Present), AD : 紀元

4. 所見

野芥遺跡第23次調査で出土した土器窯 SX02 の年代を明らかにする目的で、加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定を行った。その結果、下層で検出された炭化材(ツブラジイ)は、 1840 ± 20 BP (2σ の曆年代で 127–245 cal AD) の年代値であった。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337–360.
中村俊夫 (2003) 放射性炭素年代測定法と曆年代較正。環境考古学マニュアル。同成社, p.301–322.
Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869–1887.
Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355–363.

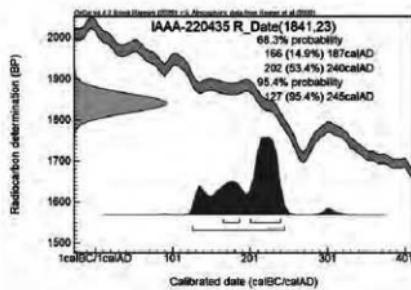


図1 曆年較正結果

II. 樹種同定

1. はじめに

木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとから、比較的近隣の森林植生の推定が可能である。また、遺構から出土したものを検討することにより、木材利用状況や流通を探る手がかりにもなる。ここでは、野芥遺跡第23次調査で出土した土器溜 SX02 で検出された炭化材について、用材選択を検討するための樹種同定を実施する。

2. 試料

試料は、土器溜 SX02 の下層から出土した炭化材 1 点である。年代測定に使用する炭化材から分割した破片を試料とする。観察した範囲で樹皮は認められなかった。

3. 方法

炭化材試料を自然乾燥させた後、横断面（木口）、放射断面（柵目）、接線断面（板目）の 3 断面について剖断面を作製し、アルミ合金製の試料台にカーボンテープで固定する。炭化材の周囲を樹脂でコーティングして補強する。走査型電子顕微鏡（低真空）で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）や Wheeler 他（1998）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

4. 結果

炭化材は、広葉樹のツブラジイに同定された。解剖学的特徴等を記す。

・ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* (Thunberg) Schottky ブナ科シノキ属

環孔性放射孔材。導管は接線方向に 1 ~ 2 個幅で放射方向に配列する。比較的大型の導管が配列する孔囲部は 3 ~ 4 列、孔囲外でやや急激に導管径を減じたのち、小径の導管が集まって火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。導管の穿孔板は單穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、単列、1 ~ 20細胞高のものと集合～複合放射組織とがある。

5. 審査

炭化材が出土した SX02 は古墳時代前期の土器溜であり、出土した土器には、在来系の他、山陰系や近畿系の土器も含まれている。炭化材は、同時に実施した年代測定では土器形式から推定される年代と矛盾しない値が得られており、何らかの理由により火を受けて炭化したのち、土器と共に堆積したことが推定される。

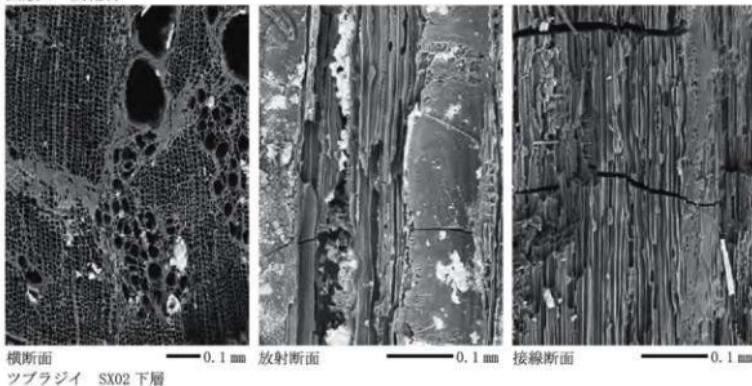
炭化材は、広葉樹のツブラジイに同定された。ツブラジイは、暖温帯性常緑広葉樹林（照葉樹林）の主要な構成種となる常緑高木であり、木材は比較的重硬な部類に入る。畠中ほか（1998）によれば、九州では約 4500 ~ 1500 年前にはシイ属やアカガシ亜属等の花粉化石が高率で検出されており、暖温帯性常緑広葉樹林が安定して維持されていたが、弥生時代～古墳時代になるとマツ属やイネ科の花粉化石が増加を始めるとされる。一方、伊東・山田（2012）のデータベースによれば、弥生時代後期～古墳時代前期の福岡市内では自然木、木製品共に常緑広葉樹の占める割合が高い。シイ属についても、

湯納遺跡の弥生時代後期～古墳時代初頭とされる自然木、那珂遺跡群の古墳時代初頭とされる住居跡出土炭化材、飯倉D遺跡の古墳時代前期とされる遺構内出土炭化材、免（鶴町）遺跡の古墳時代前期とされる護岸材や杭等に確認されている。これらの報告例から、ツブラジイは遺跡周辺の山地・丘陵地に生育しており、木材の入手は可能であったと考えられる。

引用文献

- 畠中健一・野井英明・岩内明子, 1998, 九州地方の植生史「図説 日本列島植生史」, 安田喜憲・三好教夫(編), 朝倉書店, 151-161.
- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編), 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース, 海青社, 444p.
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.(編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

図版1 炭化材





1 第23次調査区発掘風景（北西から）



2 第23次調査Ⅰ区（南西から）



3 SD01（北西から）



4 SD01 遺物出土状況（南から）

図版 2



5 第23次調査 I 区（西から）



6 SD01 遺物出土状況（西から）



7 SD01 遺物出土状況（東から）



8 SD01 遺物出土状況（西から）



9 SD01 北遺物出土状況（東から）



10 SD01 北遺物出土状況（北から）



11 SD01 北隣土層（南から）



12 SD01 遺物出土状況（南から）



13 第23次調査I区（北西から）



14 SX02 発掘風景（西から）



15 SX02 上層（東から）



16 SX02 中層（東から）



17 SX02 中層遺物 1 (西から)



18 SX02 中層遺物 2 (東から)



19 SX02 中層遺物 3 (東から)



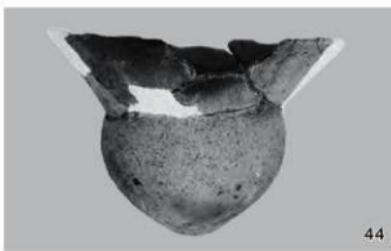
20 SX02 中層の遺物堆積（西から）



21 第23次調査Ⅱ区（西から）



22 第23次調査Ⅱ区（北西から）



報告書抄録

野芥遺跡 10

- 第23次調査報告 -

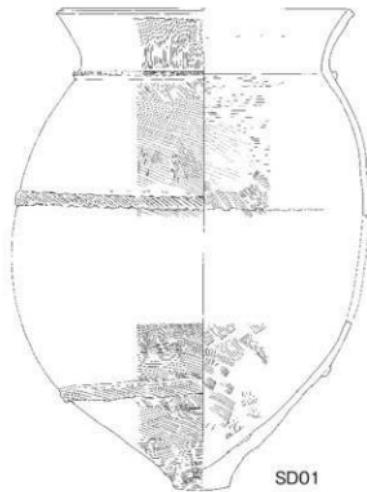
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1479集

令和5年3月23日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 株式会社大里印刷センター
福岡市東区二又瀬新町12-29

The General Report on
the 23 Survey of Noke Ruins



2023 Mar.
Board of Education of Fukuoka City